

**イ 予防接種の方法**

I、II、III型の3タイプのポリオワクチンウイルスが混ざっています。経口接種(飲むこと)によりそれぞれのウイルスに対する抵抗力(免疫)が付きます。しかし、1回接種だけでは、1つか2つの型に対する抵抗力(免疫)しかつかないこともあります。そのため、2回接種すること(41日以上の間隔をあけて)により、1回目に抵抗力(免疫)がでなかつた型に対する抵抗力(免疫)をつけます。

ポリオワクチンの接種前後、約30分は飲食を避けてください。なお、ひどい下痢をしていると、ワクチンの効果が弱まるので接種を延期してください。

**◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢**



接種をおすすめする年齢  
(標準の接種年齢/丸数字は接種回数)



無料で受けられる年齢  
(法律で定められている接種対象年齢)

年 齢	生 後																
	3 か 月	6 か 月	9 か 月	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳
接 種 名																	
ポ リ オ	②																

**ウ ワクチンの副反応**

ワクチンに使われているウイルスは弱毒化されており安全ですが、接種後体内で増えますので、450万人以上の投与に1人程度の極めてまれな頻度で、ウイルスが脳脊髄に達して麻痺を生ずることがあります。

また、ワクチン接種を受けた人から15~37日間(平均26日間)にわたって、ウイルスが便中に排泄されます。このウイルスが、免疫を持っていない人又は抗体価の低い人に感染して、麻痺を起こすことがあります。その頻度は一定していませんが、550万人に1人程度でまれなものです。

**◆ ポリオワクチンの接種について ◆**

**①海外渡航する場合**

日本国内には野生株のポリオウイルスは存在しませんが、海外の一部地域ではポリオ患者が発生しています。ワクチン未接種の方がポリオの危険性の高い地域に旅行する際は、ポリオ予防接種を受けることをおすすめします。

厚生労働省の調査で、特に昭和50~52年に生まれた方について、ポリオの免疫を保有している方の割合が、他の年齢層に比べて低いことが判明しています。接種を受けている方でもポリオウイルス常在国に渡航される場合は、再度、予防接種を受けることをおすすめします。

**※危険性の高い地域**

インド、アフガニスタン、パキスタン、ナイジェリアなど

**②お子さんがポリオの予防接種を受ける場合**

ワクチン接種後15~37日間(平均26日間)、ウイルスが便中に排泄されます。このウイルスは弱毒化されており、感染したとしても基本的に発病することはない、心配することはありません。しかし、ごく少数ですが、お子さんが接種を受けたあとに家族の方が発病した例が報告されています(特に昭和50~52年に生まれた方については予防接種を受けていても注意が必要です)。このような発病は、家族の方がお子さんと同時期に接種すれば防げると考えられますが、一方で、免疫のない方にポリオ生ワクチンを初めて接種した場合、非常にまれですが、麻痺を起こすことがあります。お子さんからの感染予防については、ワクチン接種後約1か月間は、おむつ交換などでお子さんの便に触れたあとには、十分に手洗いすることが大切です。

なお、接種を希望される方は、有料で受けることもできます。接種を受けられる医療機関など、詳しくは、福祉保健センターへご相談ください。

## 麻疹(Measles)、風疹(Rubella)

### ア 病気の説明

#### (ア) 麻疹(はしか)(Measles)

麻疹(はしか)は、麻疹ウイルスの**空気感染・飛沫感染・接触感染**によって発症します。ウイルスに感染後、無症状の時期(潜伏期間)が約 10～12 日続きます。その後症状が出始めますが、主な症状は、発熱、せき、鼻汁、めやに、赤い発しんです。症状が出はじめてから3～4日は 38℃前後の熱とせきと鼻汁、めやにが続き、一時熱が下がりがかけたかと思うと、また 39～40℃の高熱となり、首すじや顔などから赤い発しんが出はじめ、その後発しんは全身に広がります。高熱は3～4日で解熱し、次第に発しんも消失しますが、しばらく色素沈着が残ります。

合併症を引き起こすことが 30%程度あり、主な合併症には、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎などがあります。発生する割合は麻疹患者 100 人中、中耳炎は約7～9人、肺炎は約6人です。脳炎は約 1,000 人に 1 人の割合で発生がみられます。

また、麻疹にかかると数年から10数年経過した後に**亜急性硬化性全脳炎(SSPE)**という重い脳炎を発症することがあります。これは、麻疹にかかった者のうち約 10 万人に 1 人の割合で見られます。

麻疹(はしか)にかかった人のうち、1,000 人に 1 人程度の割合で死亡することがあります。

#### ◆ 空気感染 ◆

ウイルスや細菌が空気中に飛び出し、1mを超えて人に感染することです。麻疹(はしか)、水痘、結核が空気感染します。

#### ◆ 接触感染 ◆

皮膚同士のふれあい、または手すりや聴診器など物体の表面を通じての間接的なふれあいで病原体が皮膚に付着し、感染が成立するものです。

#### (イ) 風疹(Rubella)

風疹は、風疹ウイルスの飛沫感染によって発症します。ウイルスに感染してもすぐには症状が出ず、約 14～21 日の潜伏期間が見られます。その後、麻疹より淡い色の赤い発しん、発熱、首のうしろのリンパ節が腫れるなどが主な症状として現れます。また、そのほかに、せき、鼻汁、目が赤くなる(眼球結膜の充血)などの症状が見られることもあります。子どもの場合、発しんも熱も3日程度で治ることが多いので「三日ばしか」と呼ばれることがあります。合併症として関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は風疹患者約 3,000 人に1人、脳炎は風疹患者約 6,000 人に1人ほどの割合で合併します。大人になってからかかると子どもの時より重症化する傾向が見られます。

妊婦が妊娠早期に風疹にかかると、先天性風疹症候群と呼ばれる病気により、心臓病、白内障、聴力障害などの障害を持った赤ちゃんが生まれる可能性があります。

#### ◆ 潜伏期間 ◆

ウイルスや細菌などの病原体が感染してから、症状が出るまでの期間をいいます。

### イ 予防接種の方法

平成 18 年 4 月 1 日に予防接種法施行令が改正され、麻疹風疹混合ワクチンによる2回接種となりましたが、平成 18 年 6 月 2 日に予防接種法施行令が再び改正され、単独ワクチンの定期接種も認められました。これにより、平成 18 年 3 月 31 日以前に単独ワクチンを接種したお子さんも、II期の対象年齢にあたる場合は接種対象となります。

また、平成 20 年 4 月から平成 25 年 3 月までに麻疹(はしか)を排除することを目的とした、「麻疹排除計画」に基づき、5年間の時限措置として、中学校1年生(Ⅲ期)及び高校3年生(Ⅳ期)に相当する方に、麻疹及び風疹予防接種を実施することとなりましたので、以下のとおり接種を受けてください。

#### (ア) I 期接種

生後 12 か月～24 か月未満の間に、麻疹風疹混合ワクチンを 1 回接種します。なお、麻疹及び風疹単独ワクチンの接種を希望する場合は、単独ワクチンを 27 日以上の間隔をあけて各 1 回接種します。

※麻疹及び風疹両方にかかったことのある場合は、接種の必要はありません。

#### (イ) II 期接種

5歳～7歳未満で小学校入学1年前の4月1日～入学する年の3月31日までの間(いわゆる幼稚園の年長児)に麻疹風疹混合ワクチンを1回接種します。なお、麻疹及び風疹単独ワクチンの接種を希望する場合は、単独ワクチンを27日以上の間隔をあけて各1回接種します。

※麻疹及び風疹両方にかかったことのある場合は、接種の必要はありません。

※麻しんについての注意事項

1歳前に保育園等に入園させる場合には、9か月から麻しん(はしか)単独ワクチンを任意(有料)で受けることをおすすめします。その場合、お母さんからの免疫の影響で免疫がつきにくいことがありますので、1歳になったら、法律で定められている予防接種(無料)を受けてください。

ガンマグロブリン製剤の注射を受けたことのある方は3か月以上、川崎病などでガンマグロブリン製剤の大量療法を受けたことのある方は6か月以上経過してから、麻しんの予防接種を受けてください(ガンマグロブリンは血液製剤の一種で、A型肝炎などの感染症の予防目的や重症の感染症の治療目的などで注射することがあります)。

(ウ)Ⅲ期及びⅣ期接種(平成20年度～24年度までの5年間に限り実施)

中学1年生及び高校3年生に相当する1年の間に、麻しん風しん混合ワクチンを1回接種します。

※麻しん及び風しんワクチンを2回接種している又は麻しん及び風しん両方にかかったことのある方は接種の必要はありません。

なお、麻しん及び風しん単独ワクチンの接種を希望する場合は単独ワクチンを各1回接種(27日以上の間隔をあけて)します。

※麻しん・風しん予防接種については、妊娠していることが明らかな場合は、接種を受けることができませんのでご注意ください。また、接種後2か月間は避妊が必要となります。

◇接種をおすすめする年齢

① 接種をおすすめする年齢 ※無料で受けられる年齢も同じ期間となります。  
(標準の接種年齢/丸数字は接種回数)

年齢	生後																						
	3 か 月	6 か 月	9 か 月	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳	15 歳	16 歳	17 歳	18 歳	19 歳	
麻しん、風しん Ⅰ期				①																			
Ⅱ期									★①														
Ⅲ期																★①							
Ⅳ期																							★①

★5歳～7歳未満で小学校入学1年前の4月1日から入学する年の3月31日までの間に接種してください。

★中学校1年生及び高校3年生に相当する1年間の接種対象となります。

ウ ワクチンの副反応

(ア)麻しん風しん混合ワクチン

主な副反応は、発熱(接種した者のうち20%程度)や、発しん(接種した者のうち10%程度)です。これらの症状は、接種後5～14日の間に多く見られます。接種直後から翌日に過敏症状と考えられる発熱、発しん、掻痒(かゆみ)などがみられることがありますが、これらの症状は通常1～3日でおさまります。ときに、接種部位の発赤、腫れ、硬結(しこり)、リンパ節の腫れ等がみられることがあります。いずれも一過性で通常数日中に消失します。

まれに生じる重い副反応としては、アナフィラキシー様症状(ショック症状、じんましん、呼吸困難など)、急性血小板減少性紫斑病(紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等)、脳炎及びけいれん等が報告されています。

(イ)麻しん単独ワクチン

主な副反応は、接種後5～14日を中心として、37.5℃以上38.5℃未満の発熱(接種した者のうち約5%前後)、38.5℃以上の発熱(接種した者のうち約8%前後)、麻しん様の発しん(接種した者のうち約6%前後)がみられます。ただし、発熱の期間は通常1～2日で、発しんは少数の紅斑や丘しんから自然麻しんに近い場合もあります。その他に接種した部位の発赤、腫れ、熱性けいれん(約300人に1人)、じんましん等が認められることがあります。いずれもそのほとんどは一過性です。

まれに生じる重い副反応としては、アナフィラキシー様症状、脳炎脳症(100～150万人接種当たり1人以下)、急性血小板減少性紫斑病(100万人接種当たり1人程度)が知られています。

ワクチン接種後に起こる亜急性硬化性全脳炎(SSPE)は極めてまれであり、自然の麻しんウイルスに感染し、発症した場合の1/10以下程度と報告されています。